

トップコミットメント



京都大学は創立以来、自由の学風のもと闊達な対話を重視し、京都の地において自主独立の精神を涵養し、高等教育と先端的学術研究を推進し、111年が過ぎました。

激動の変革期といえる現在、京都大学には、自由の学風を継承発展させつつ、多面的な課題の解決に果敢に挑戦し、地球社会の調和ある共存に貢献することが期待されています。

人類の未来には地球温暖化、エネルギー、水、環境、食料、資源問題等が待ち構えています。今、まさに人類にとって地球が有限に見える段階になり、人間自身の生存が問われる時代に直面しています。

そこで私は、人間社会の「サステナビリティ(持続可能性)」よりも人類の「サバイバビリティ(生存可能性)」こそ、今考えるべきと思っています。その観点で世界を眺めてみると、個人、組織、地域、国、世界の様々なレベルで生存が問題となる大競争時代がすでに始まっています。環境や資源、エネルギーなどに関し、生存を支える科学技術の開発が問題解決に間に合うかどうか、そのスピードが極めて重要となります。しかし、ここで注意しないといけないのは、サバイバビリティに取り組む際、弱肉強食の世界になってはいけないということです。人文学や社会科学の知恵も動員し、共生を重視する日本の和の発想を基にした「生存学」を創生していく必要があります。科学技術による生存の基盤を支える『生存基盤学』を通じ、世界の生存を保証することを考え、あわせて共生を基礎とする和の精神を活かすことが、世界のサバイバビリティの実現に役立つのではないかと考えています。

私は、大学は我が国および人類の将来にとって知の源泉であり、^{えんよく} 衍沃な大地のごとく、永遠に枯れることなく人材と知恵を生み出すための、もっとも必要とされる存在であるべきだと考えています。京都大学は、人類の生存のために、科学技術だけでなく人文学や社会科学の知恵や文化も生み出していきたいと思っています。

そして、まさに地球温暖化時代に立ち向かう象徴的な京都というこの地において、多様性を特徴とする総合大学として、教育・研究・社会貢献の使命を果たすべく、時流に流されることなく、「凜」とした気概を持ち、学術の府としてその存在を国内外に示し、同時に京都という誇りと文化に満ちた環境下で、これらの課題に取り組みたいと思います。

京都大学総長

松本 紘